常葉大学外国語学部紀要〈論文〉
第34号　　2017.12.　　25頁～　33頁

外国語活動と他教科の連携による内容言語統合型学習の成果と課題
－家庭科との連携による CLIL 実践の試み－

星　野　洋　美

A Practical Study of Content and Language Integrated Learning in Upper Elementary Grades: Cross-curricular Foreign Language Activities Instruction Utilizing Home Economics

Hiromi HOSHINO

2017 年 9 月 8 日受理

抄　　録

外国語活動の指導内容や活動について、「児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること」（前学習指導要領）となっており、外国語活動と他教科との連携が推奨されている。外国語活動の担当教員は、Hi Friends を活用し、ALT や地域人材と協力して、授業の内容や方法についてより良くするよう一生懸命努力しているが、具体的に他教科の内容を英語に生かす連携授業を積極的に行った例は極めて少ない。このような状況を受け、本研究では、内容言語統合型学習（CLIL）の手法を取り入れて、家庭科との連携による外国語活動の授業をおこない、その効果や課題について明らかにした。その結果、CLIL は、発表等の表現する場面や、調理実習など体験的活動の場面での効果が認められた。しかし、話し合いの場面や問題解決場面においては効果が期待したほどの効果は認められなかった。連携授業を行う際は、事前学習の充実や、連携内容の精選を行う必要があることがわかった。今後は、今回の結果をもとに、より効果的な CLIL を取り入れた連携授業を提案していきたい。

キーワード：内容言語統合型学習（CLIL）、JSL、外国語活動、英語教育、家庭科教育、グローバル化、多文化共生

Ⅰ．研究背景および研究目的

2008（平成 20）年に公示された中央教育審議会答申[(1)]では、外国語活動を小学校段階から始める理由として、「社会 や経済のグローバル化が急速に進展し、異なる文化の共存や持続可能な発展に向けて国際協力が求められること」「人材育成面での国際競争も加速していることから、学校教育において外国語教育を充実することが重要な課題の一つとなっていること」「国家戦略として小 学校段階における英語教育を実施

する国が急速に増加していること」の 3 点を挙げている。

また、同答申の中で「小学校段階にふさわしい国際理解やコミュニケーションなどの活動を通じて，コミュニケーションへの積極的な態度を育成するとともに，言葉への自覚を促し，幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うことを目的とする外国語活動については，現在，各学校における取組に相当ばらつきがあるため，教育の機会均等の確保や中学校との円滑な接続等の観点から，国として各学校において共通に指導する内容を示すことが必要である。その場合，目標や内容を各学校で定める総合的な学習の時間とは趣旨・性格が異なることから，総合的な学習の時間とは別に高学年において一定の授業時数を確保することが適当である」とあり、外国語活動の授業設置に至るまでの経緯について示している。 総合的な学習の時間が創設された際には、国際理解教育の一環として始まった外国語活動であったが、このような経緯から、現在は英語を主とした言語活動が中心となっており、中高校における「英語」につながっていくことを強く意識していることがうかがえる。

以上の経緯を経て、2011（平成 23）年度より実施された小学校学習指導要領において、主にコミュニケーション能力の素地を養うことを目標とした「外国語活動」が必修化された。外国語活動の授業担当者はその目標をもとに、「言語・文化についての体験的理解」や、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」「外国語の音声や基本的表現に慣れ親しませること」を踏まえ授業を実践することとなった。指導計画の作成に当たって配慮する事項として「外国語活動の指導内容や活動については , 児童の興味・関心にあったものとし，国語科，音楽科，図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により，指導の効果を高めるようにすること。」となっており、外国語活動の指導内容が高学年児童の興味に合うものとするために他教科との連携を示唆していることがわかる。[(2)]

この外国語活動の本格的実施の約 10 年前、公立小学校に通う外国人児童のための日本語学習指導がシステム化し本格的に行われるようになった。まず、取り出し指導や特別支援のかたちで、徹底的に日本語の初期指導を行い、次に、ある程度日本語の力をもった児童に対して学習活動に参加するための学ぶ力の育成を目的とした JSL カリキュラム※を実施した。JSL とは「Japanese as a second language」の略であり、JSL カリキュラムとは、学習活動に参加するための日本語力の育成を図るためのカリキュラムで、具体物や直接体験という活動を通して学ぶ「トピック型」カリキュラムと、各教科の学習活動への参加を通して「学ぶ力」の育成を目指す「教科志向型」カリキュラムがある。ここでは、単に日本語で日常会話が出来ることを求めているのではなく、日本人児童と共に授業に参加出来るくらいの日本語能力（先生の言っていることが理解できる・話すことや聞くこと・読むこと・書くことが出来ること）を求めているのである。外国語活動では、英語の習得に重きを置いてはいるが、小学校段階ではコミュニケーションの素地を養う程度であり、日本語の習得を必須目標としている外国につながりのある児童と比べて、求めている度合いがずいぶん違うことが明白である。また、外国語活動の授業と一日 15 分程度のモジュール学習での取り組み

が殆どで、取り出し指導や特別な支援が行われない中、英語で日常会話が出来るまでにするのは大変難しいと思われる。

このような状況の中、2020（平成32）年度から小学校で英語が教科として本格的に導入されることが決まった。しかしながら、多くの小学校教員は、英語をどう教えたらよいのか、非常に悩んでいる。現行の外国語活動においては、外国語活動教材“Hi, Friends！”等を活用し、ALTや地域人材と協力して授業を展開している。外国語活動の専任教員がいるところもあるが、殆どは担任が担当しており、教科全般の学習指導に明るいとはいえ、各々の教科の教材研究の時間確保が大変で、他教科の内容を英語に生かす指導方法まではなかなかたどり着けない状況となっているという。

本研究者は外国につながりのある子どもたちの教育支援に携わってきた経緯から、JSLの英語版ということで、ESL（English as second language）を利用することを想定したが、学校教育においてESLカリキュラムを活用することに意義があるとは思われない。周知のとおり、英語教育については中学校や高校で教材や教育方法について研究がされ、先進的な取り組みがされているからである。中学や高校の英語につながる初期指導が小学校における外国語活動や英語という位置付けになるといえる。

小学校における外国語活動では、まず英語を学ぶことへの動機づけが大切であると思われるが、日本語で事足りる社会に生きていると、英語に対する必要感が薄いのではないかと心配になる。「児童の興味・関心にあったもの」「他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫」が提示されていたが、授業担当者はどのように取り組んでいるのだろうか。英語を第二外国語として学ぶ諸外国で、初等教育において、このような取り組みを行っている例はあるのだろうか。

以上のことを模索している中、外国学部の教員によって開かれた勉強会に参加させていただいたところ、欧米において、学習者の体験的学習の促進を目的としておこなう言語学習と教科内容を統合させた「内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning）」というやり方が既に行われていることを知った。そこで、本研究者はこの内容言語統合型学習（CLIL）の手法を取り入れて他教科との連携による外国語活動の授業を提案したいと考えた。

この「内容言語統合型学習」については、日本でいち早く実践的研究を手がけた山野有紀氏によって、「近年ヨーロッパでは、この教科内容と外国語学習を統合、質の高い外国語教育の実現をめざす『Content and Language Integrated Learning（CLIL）』が広く実践研究されるようになったこと」、「CLILとは，ヨーロッパを起源とする外国語指導法で，言語学習と教科内容を統合させ，そこに思考活動と協学，異文化理解を取り入れ，学習者の体験的学習の促進を目的の１つとしていること」と紹介されている。[(3)]

本研究では，他教科との連携による英語の授業ということで、CLILを取り入れた授業を行っていきたいと考えた。その第一弾として、家庭科との連携授業におけるCLILの導入を試み、その効果や課題について明らかにすることとした。

Ⅱ．家庭科との連携授業の意義

家庭科の現学習指導要領の内容は、現代の生活課題によりそった内容となり、学ぶ内容がさらに充実しているにもかかわらず、生活課題に応えうる授業や体験的活動を伴う授業を実施できる環境が十分に整っているとは言えない。

2011（平成23）年度より小学校5・6年で年間35単位時間が必修化された外国語活動の目標は、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うこと等となっている。しかし､外国語活動も授業時間が不十分でモジュール学習が推奨されており、こちらについても､目標が達成できる環境が十分ではない状況となっている。さらに、指導方法・体制や、教員研修、外部人材登用等の課題もある。そのような中、次期学習指導要領で、小学校3・4年生で「外国語活動」、5・6年生で「外国語科」が必修化されることとなったのである。

このような状況を受け、本研究では、家庭科の学びを、外国語活動の学びに活かす合科授業の可能性について、授業実践をもとに模索することとした。外国語活動の教材「Hi! Friends」に“ランチメニューをつくろう”という題材があることから、家庭科で実施している献立作りを外国語活動との合科で実施したところ、日常食の多くが外国と関係があること（メニュー自体、材料など）や、カロリー・メニュー・レシピ・ランチなど日常的に使われている食に関わる言葉の多くが英語であること等、新たな発見ができた。さらに、外国語活動の目標である“言語や文化について体験的に理解を深めること”や、外国語活動の課題である“英語を学ぶ必要性についての理解が児童に十分伝わること”に、家庭科の献立作り等の内容が効果的であることも垣間見ることができた。また、献立作りを発展させて調理実習という体験的活動の授業になった際に、英語でのやり取りができて、“積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成”につながることが予想された。もちろん、これらの合科授業を行う際には、英語でのやり取りができるよう事前学習を行うことや、家庭科で栄養知識や調理技能などの基礎の学びがあることが前提となっていることは、言うまでもない。

Ⅲ．研究方法

本研究では、家庭科の学習内容がグローバル時代の多様な生活課題に応えうる内容となっていること、それゆえ外国語活動との連携によるCLIL授業が可能であることを踏まえ、CLILを実践することとした。

CLIL授業実施のために､まず､外国語活動における単語や簡単な文（お願い･質問･注意）の学習が必要なこと、題材に関する家庭科の基礎・基本の習得が大切であることを確認して事前学習を行うこととした。

授業実施については、教科担当および担任が主となるが、ALTあるいはALTにかわる学習支援者、そのほか内容に見合う専門家の方をお願いするなど、学習効果が高まるような支援ができる人材の協力をお願いすることにした。

授業実践後については、授業案や実践記録をもとに、外国語活動の目標や課題・家庭科の目標や課題にそっての４Ｃ分析を行なった。学習者や参観者の感想も分析を行う上での参考にした。

Ⅳ．研究結果

１．家庭科と外国語活動における内容言語統合型学習（CLIL）の分析について

本調査研究においては、家庭と外国語活動の学習成果を検討していくうえで、CLIL における分析方法を採用した。具体的には CLIL 実施に欠かせない４つの C「内容（① Content）、言語（② Communication）、思考活動（③ Cognition）、文化・国際理解 / 協同学習（④ Culture / Community）」を分析項目とし、その項目に見合う活動内容を書き出して、それぞれの評価をおこなうこととした。[4]

２．分析結果

⑴食生活「１食分の献立を作ろう」＆外国語活動「ランチメニューを考えよう」

（平成 28 年 11 月実施　Ｙ小学校５年生 29 人　授業者：担任・ALT・栄養教諭）

A．分析項目及び結果

① Content

学習言語を英語

→作成時の話し合いは日本語、発表は英語になっていた。

② Communication

献立名、食品名、質疑応答（What's this?　等）の英語表現に慣れ親しむ。

→大体できていた。しかし、話し合いが深まるにつれ、日本語でのやりとりが多くなった。

③ Cognition

学習言語を使用してのランチメニュー（昼食献立）作成と紹介

→作成時の話し合いは日本語、紹介時の発表は英語になっていた。

④ Community / Culture

・学習言語を使いながら班ごとに協力してランチメニューを作成する。

（提示された 20 の献立から５品選んでランチメニューを作成。）

→日本語が多かった。なぜこの５品を選ぶのかを説明する際、日本語となってしまった。

・ALT の国のランチについて知る。

→ ALT の英語がやさしくゆっくりな上に、写真があったので、よくわかった。

B．学習効果について

○この授業は、外国語活動の教科書（Hi, friends!　1　文部科学省）の「Lesson　9　What would you like? ランチメニューを作ろう」との合科授業であるが、CLIL を主にした分析を取り入れたため、言語活動が主となっていると教員が考えていたことが児童にも若干反映していたと思われる。

○「家庭科と英語の授業が同時にできて楽しかった」といった内容の感想が７割あっ

たが、家庭科と英語を担当している担任・ALT・栄養教諭が行うことにより、このように家庭科と英語を同等にとらえた感想が多かったと思われる。

⑵食生活「アップサイドダウンケーキを作ろう」＆外国語活動「調理を通して日常会話を学ぼう」

（平成 28 年 11 月　T 小学校高学年 18 人　授業者：家庭科教員・外国語授業支援員 2 名）

A. 分析項目及び結果（→）

① Content

調理実習の学習言語は英語にする

→だいたい出来た。想定外の作業（床掃除、ゴミの分別等）があった場合は日本語が多く話された。

② Communication

食品名や器具名、何をどうするのかを示す文（「What do you want?」「I want ～ .」等）の英語表現に慣れ親しむ

→かなりできていた。家庭科と外国後活動での事前学習の効果があった。

③ Cognition

学習言語を使用して調理の実践をする

→今回は 1 品だったこともあり、できていた。

④ Community / Culture

学習言語を使いながら班ごとに協力してアップサイドダウンケーキを作成する。

→日本語を使いそうになると班員が注意する様子が見られた。

協力し合い、注意し合いよく頑張っている姿が見られた。

B. 学習効果について

○「英語の勉強をするのに、調理実習はよかった」「教室でやる英語の授業よりもおもしろかった」「英語を話すことが恥ずかしくなかった」といった学習者の感想が示すように、前授業よりも英語が主体の授業と捉える児童が多かった。

○家庭科の学習内容としてどうなのかと疑問を呈する題材であり、調理としては簡単すぎると考えられる「アップサイドダウンケーキ」を扱ったことから、英語を使うことが主になってしまったと思われる。

○先の献立作りは栄養に関する知識があってこその授業であり、難易度も発達段階に応じたものであったが、今回のケーキ作りは家庭科における知識も技能も発達段階から考えると相応とは言い難いことから、英語の学習であるという思いが強くなったといえる。

○全体を通して：授業者や参観した教員や大学生から、「家庭科の授業や体育の授業は得意であるが、外国語活動というと苦手意識が強くて消極的になりがちな児童でも、だれでも活躍できる授業になったので、良かった」「これから子供達の実態に応じて他の教科と外国語活動の合科をやりたいと思えた」「ALT の先生も

もっと子供と近くなった感じで楽しく活動できていた」「ぜひ、小学校の教員になったら、こんな授業をやりたい」という感想があった。家庭科の授業としての評価や感想があまりなかった。しかし、英語学習のやり方が大きな課題となっている今、この CLIL 授業は一つの授業方法を提示した点で、意味のあるものであったと考えることが出来る。

Ⅴ．今後の課題

言語学習と家庭科の内容を統合させ、学習者の体験的学習の促進を目的の１つとした学習方法ということで CLIL に着目して研究を行った。しかし、CLIL はあくまでも質の高い外国語教育の実現をめざす学習方法であることから、外国語活動の比重が高くなる。家庭科の学習との五分五分の学習にはなりえない。家庭科の基礎・基本は家庭科の授業できちんと習得させることが大事で、それを踏まえての合科ならば、家庭科と外国語双方の学習効果が大きいと思われる。

中村（2007）は、担任による外国語活動指導の充実を目標に、主に家庭科との関連を生かした外国語活動の授業を行い、その成果をもとに、他教科との関連を生かした英語活動の指導の工夫についてのポスター発表を行っている。（資料１）この論文およびポスターから、異文化理解が深まったこと、そして単元作成にかなり時間を要したこと、それだけに学習効果が高かったことがわかった。また、課題として、“単元の作成過程で手間をかけずに活動を考えられるような事例の開発”があげられていた。そこで、本研究者は、言語学習と体験的学習の促進をもたらす CLIL を取り入れることで、課題解決につながるのではないかと考えた。本研究での実践が参考にした由利小学校（2016）※※のランチメニューをつくろうの研究授業で見られたように、ALT や栄養教諭などとの効果的な連携、アクティブラーニングを上手く取り入れることが、CLIL の効果的実践につながると思われる。

引用文献

⑴池田真（2011）「第１章 CLIL の基本原理」『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦　第一巻　原理と方法』上智大学出版　pp1-13
⑵中央教育審議会（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」文部科学省 2008 年１月 17 日初等中等教育局
⑶文部科学省（2008-2009）『小学校学習指導要領「第４章　外国語活動」』および『小学校、中学校、高等学校学習指導要領「生きる力」』
⑷中村浩子（2007）「他教科との関連を生かした英語活動の指導の工夫」やまぐち総合教育支援センター平成 19 年度紀要　pp25-38
⑸山野有紀（2013）「小学校外国語活動における内容言語統合型学習（CLIL）の実践と可能性」（2013）EIKEN BULLETIN vol.25 号 pp94-126

注

※ JSL カリキュラム：JSL カリキュラムは、日本語の初期指導を受けて基本的な日本語の会話が出来た児童生徒に対して、日本語指導と並行して実施するためのカリキュラムである。つまり、日本語が不十分なため、日常の学習活動に参加することが大変な子どもたちのために、学習活動に参加するための日本語力の育成を図るためのカリキュラムということである。

JSL カリキュラムでは、大きく 2 つのタイプを想定している。一つは、「トピック型」JSL カリキュラムであり、もう一つは「教科志向型」JSL カリキュラムである。「トピック型」JSL カリキュラムとは、具体物や直接体験という活動を通して、しかも他の子どもとの関わりを通しながら、日本語で学ぶ力を育成することが主目的である。「教科志向型」JSL カリキュラムは、各教科の学習活動への参加を通して「学ぶ力」の育成を目指すものである。教科の学習で必要な力を育成する上で適切な単元、領域、内容を選択し、その内容について学習を展開していくことになるが、その際、具体物や体験、あるいは既有知識を支えにして子どもたちの追求が行われる。その追求が学習活動への参加につながり、しかも、追求過程で子どもたちの理解の度合いを日本語で表現することが学習活動に参加するための学ぶ力の育成につながるという。

両カリキュラムとも、基本的には初期指導を終え、ある程度日本語の力をもった子どもたちを対象にして、学習活動に参加するための学ぶ力の育成を図ることをねらっている。しかし、場合によっては初期指導の段階でも「トピック型」カリキュラムを利用することもできる。また、両方のカリキュラムとも取り出し指導や個別指導という特別の指導を想定しているが、それにとどまらずに所属学級で他の子どもたちと一緒に学習することも念頭に置いている。

（参考：文部科学省初等中等教育局国際教育課「学校教育における JSL カリキュラムの開発について」）

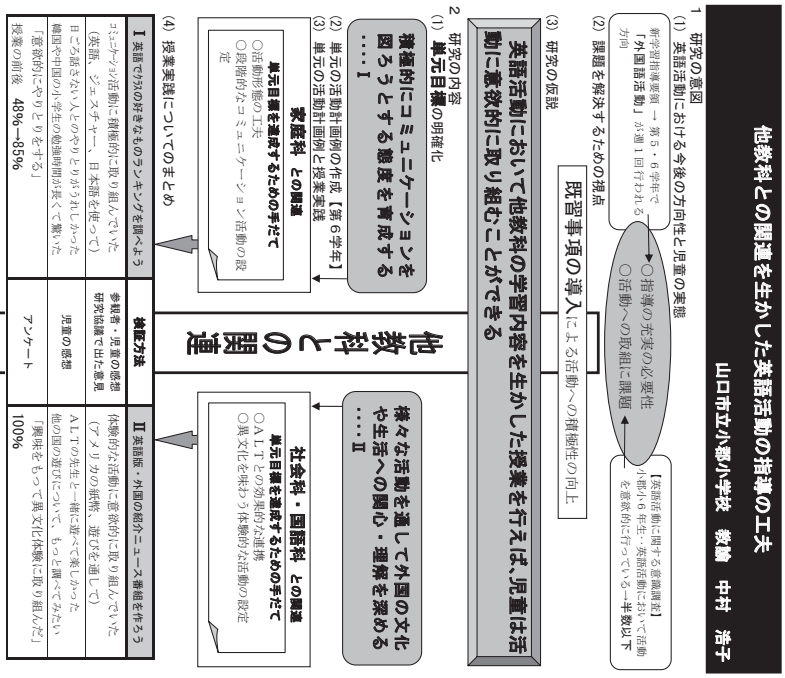
※※文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」指定公開研究会が、2016（平成 28）年 11 月 9 日㈬に由利本荘市立由利小学校で実施され、本研究者も参加させていただいた。

Abstract

The purpose of this study is to clarify the effects and challenges of English classes through collaboration with home economics.

The results are as follows: Content and Language Integrated Learning(CLIL) was an effective teaching method for learning English. In this attempt, CLIL was not valid for home economics. The reason for this is as follows. The first reason is that there was a problem with the analysis method. The second reason is that the content of home economics is not suitable for the developmental stage. In the class of the menu making, it is important for students to discuss it. However, they could not debate in English. After they have decided on the menu, they could make speeches in English about it. They could practice the questions and answers in English. They couldn't get deep learning for the study of home economics. I would like to continue CLIL practice research in primary schools.

資料 1.「他教科との関連を生かした英語活動の指導の工夫」のポスター



（中村　2009）